

あずき新品種「ハヤテショウズ」解説

| | |
|-------|------------|
| 誌名 | 農業技術 |
| ISSN | 03888479 |
| 著者 | 村田, 吉平 |
| 巻/号 | 31巻9号 |
| 掲載ページ | p. 410-411 |
| 発行年月 | 1976年9月 |

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



取であり、ほぼ「キタムスメ」並である。低温処理試験の結果によると、開花時期の低温に対しては「トヨスズ」より安定している。

裂葉性は従来品種と同程度である。

栽培上の注意

(1) 「ヒメユタカ」はダイズシストセンチュウに対して抵抗性はないので、被害の恐れのある圃場での栽培はさけること。(2) 子実が大きいので、発芽は小粒のものより1~2日程度遅れ、発芽率がやや低下する場合がありますので、種子は必ず薬剤を粉衣してから播種すること。(3) マメシンクイガの被害が比較的多いので、適期に防除を行なうこと。(4) 耐倒伏性は「キタムスメ」並であるので、とくに窒素は多用はさけた方がよい。その他は、「北見白」、「キタムスメ」および「トヨスズ」などの一般既存品種の栽培に準じて行なえばよい。

栽培適地

「ヒメユタカ」は北海道十勝管内、網走管内、上川管内中南部およびこれらに類似の地帯に適する。ただし、十勝中央部は豆作率が高く、ダイズシストセンチュウの密度が高いため適さない。

したがって、上記の地帯で白目良質品種を望むところは、「北見白」、「キタムスメ」の一部におきかえる。またこの地帯で、ダイズシストセンチュウの密度が低く、被害の認められない地帯では「トヨスズ」を全面的におきかえる。普及見込み面積は4,000haである。

命名の由来

子実が大きく豊満で、収量性も高い。また、成熟期における草姿は、白毛で、女性的な美しさと豊かさを連想させる。農産を期待して女性の愛称を付した。

育成関係者：佐々木絏一・三分一敬・酒井真次・土屋武彦・斉藤正隆
(北海道立十勝農業試験場)

あずき新品種「ハヤテショウズ」の解説

村田吉平

—登録番号 あずき農林2号(系統名：十育85号)—

来歴ならびに育成経過

本品種は、北海道十勝農業試験場において、早生、良質、多収を主要育種目標として、「宝小豆」を母に「斑小粒系-1」を父として人工交配し、 $F_2 \sim F_3$ は集団選択(F_3 は鹿児島にて世代短縮) F_4 で個体選抜を行ない、以降系統選択により固定をはかってきたものである。昭和45年より「5082」の系統名で生産力検定予備試験に入られ、早生系統で最も多収を示し、翌昭和46年は、冷害であったが、同様に多収を示した。昭和47年以降は「十育85号」の系統名を付し、生産力検定試験、昭和48年より、特性検定試験、地域適応性検定試験、奨励品種決定現地調査



<左より宝小豆、ハヤテショウズ、茶殻早生>

(育成系統現地調査)がなされ、主に早生品種の「茶殻早生」を対象として地方適否を確かめたものである。また、地方番号を付し

てからは、ファイトトロンにおいて、耐冷性検定がなされた。

形態的特性

莖色、花色などは「茶殻早生」と同じであるが、葉色は生育後期で、「茶殻早生」よりややうすい緑である。葉形は、生育後期で、小葉の先がややとがり剣先様を呈する。草丈、主茎節数などは「茶殻早生」と「宝小豆」の中間である。着莢数は「茶殻早生」より多く、ほぼ「宝小豆」並である。熟莢色は「茶殻早生」と同じ褐色を呈し、先端がわずかに彎曲してやや細い。子実の形状は短円筒形で丸味を帯び、粒色は「茶殻早生」よりやや濃い赤であるが、刈りおくれなどで粒色にむらが生じることがある。

生態的特性

開花始は「茶殻早生」より3日前後早く成熟期は2~3日遅い早生品種に属する。耐倒伏性は「茶殻早生」より弱い、「宝小豆」より強い。輪紋病の被害は「茶殻早生」と同程度である。

収量性は、育成地の生産力検定試験成績によれば「茶殻早生」より8~35%、4カ年平均で22%多収を示し、「宝小豆」より5%低かった。早生品種であるが、条件によっては「宝小豆」と同程度の収量を示す。また不良

第4表 生産力検定試験成績(昭和47~50年平均)

| 項目 品種 | 開花始 | 成熟期 | 倒伏 程度 | 草丈 | 1株当り 着莢数 | 平均 莢粒数 | 子実重 | 茶殻早生 氏 | 宝小豆 比 | 1000 粒重 | 種皮の 厚さ* | 種歩 皮合* |
|----------|------|------|----------|----|-------------|-----------|-----|-----------|----------|------------|------------|-----------|
| | 月日 | 月日 | | cm | | | kg | % | % | g | mm | % |
| ハヤテショウズ | 7.25 | 9.13 | 0.2 | 38 | 48 | 6.47 | 281 | 122 | 95 | 114 | 0.066 | 9.14 |
| 茶殻早生 | 28 | 11 | 0 | 29 | 41 | 6.60 | 231 | 100 | 78 | 117 | 0.067 | 9.22 |
| 宝小豆 | 29 | 18 | 0.5 | 51 | 47 | 7.05 | 296 | 128 | 100 | 119 | 0.071 | 8.57 |

*) 昭和49年度産種子

気象条件においても生育よく、減収程度が少なく、「茶殻早生」より多収性と共に安定性が高い。また多肥あるいは密植では、「茶殻早生」「宝小豆」と同様、多収が得られ、早霜を予想した早刈りにおいても、「茶殻早生」、「宝小豆」より多収を示す。

外觀的品質は「茶殻早生」並みである。1,000粒重は「茶殻早生」と同程度かわずかに軽い小粒種(普通小豆)である。種皮の厚さおよび種皮部合は、「茶殻早生」とほぼ同じである。

北海道において奨励品種に採用しようとする理由

北海道における小豆作付面積は5万ha前後あり、早生品種は10%余り作付され、その作付の中心は道東道北である。また、小豆は、北海道での栽培作物中、低温、霜害に特に弱い。従って小豆作の限界地帯は、常に収量が不安定であり、また品種も、大正3年優良品種となった「茶殻早生」1品種であるため、これらの地帯に適應する早生安定多収品種の育成が強く要望されていた。本品種は、「茶殻早生」に類似の成熟期であり、多収性、安定性を有するところから採用された。

栽培適地、対象品種および栽培上の注意

道内各農試で行なわれた地域適応性検定試験、ならびに奨励品種決定現地調査の結果から、十勝、網走、および上川の畑作地帯に適應する。十勝、網走、および上川地帯の「茶殻早生」と全面的におきかえるとともに、「宝小豆」の一部にも置きかえる。栽培は「茶殻早生」に準じてよいが、品質を低下させないよう、適期収穫および

適正な収納作業に心がける必要がある。また多肥条件、密植条件に対する反応は「茶殻早生」より大きいので、増肥、密植化をはかることにより多収が期待できる。

命名の由来

本品種は早生であり、開花始は従来の早生品種より早く、現保存品種を含めて最も早い。疾風の如く花をつけ、莢の成熟も最も早く熟莢をつけるなど、早熟性を強調して「ハヤテショウズ」とする。

小豆の育種目標

昭和47年、小粒中生品種「榮小豆」、昭和48年、大粒品種「アカネダイナゴン」、昭和50年「ハヤテショウズ」が育成され、従来の品種に換わる品種が育成されたことになる。ここに、今後の小豆の育種目標を熟期と粒大とに分けて示す。

ア. 小中粒中生品種：早生化をはかるとともに、さらに耐冷安定性、多収性を賦与する。

イ. 小中粒早生品種：ピンハーベスタによる収穫を容易にするため、草丈を高くし、多収化をはかる。

ウ. 大粒品種：早生化と同時に莢内粒数を増加することにより多収化をはかる。

共通の目標としては、耐冷性および昭和50年度より検討をはじめた「小豆落葉病抵抗性」があげられる。

育成関係者：野村信史・佐藤久泰・後木利三・松川勲・兼平修・成河智明・千葉一美

(北海道立十勝農業試験場)

オーチャードグラスの新品種「アキミドリ」について

川端 習太郎

—登録番号 オーチャードグラス 農林合4号(系統名:那系14号)—

来 歴

昭和38年以来、それまでに選抜された優良株の後代系統、ならびに国内および国外より収集した育種母材など13,000個体について、主として再生力、黒さび病抵抗性などに関し、個体選抜、栄養系選抜、さらには多交配後

代による組合せ能力の検定を順次行なって、昭和43年秋には、最終的に22栄養系を選定した。本品種は、この20栄養系中、極早生に属する8栄養系を組合せて合成品種法により育成したものであって、昭和47年秋から昭和52年まで「那系14号」の系統名で、系統地域適応性検定試